

## 主婦志向から悲鳴が聞こえる

朝、ときどき、前の職場の男性職員から「出勤がなくて喫茶店（あるいはコンビニ）から出られない」というメールが届く。「早く定年退職したい」が彼の口癖で、同僚の女性にそういったら、「私だって専業主婦になることばかり想像しています」と返されたという。彼も彼女も働き盛り、ダメ社員どころか非常に有能で相当な要職にある。かつて私が終電を逃すまいと職場を駆け出ようとすると、いつも彼女がいて、仕事を終わらせる気配もなく、真っ赤に充血した目でパソコンを見ていた。残業後はタクシーで酒場を経由して明け方に帰らしい。そして彼女が家に着くのと同時頃、夜も明けぬうちに、彼の自宅からはメールで仕事の資料がよく送られてきた。

藻谷浩介さんは、「私には2人の子どもがいるのですが、大学を出て大企業に入って残業続き、という人生を歩んでほしくはない。子孫も残せず、消費されるだけの一生よりも、田舎に行って年収200万円ぐらいで農業をやっているほうが、よほど幸せだと思うのです」と語る（『中央公論』2013年12月号）。

内閣府の調査をみると、農山漁村に定住したいと思う都市住民は3割にまで増えている（農山漁村に関する世論調査、2014年）。また、専業主婦に賛成する女性は4割を超える（女性の活躍促進に関する世論調査、2014年）。

アメリカでは実際に、多くの高学歴で進歩的なキャリア女性（男性も）が、長時間労働や職場の性差別と闘おうとせず、子育てに専念するために企業社会から「選択的に離脱」する現象が注目された。田舎に移住して有機農法で環境とからだにやさしい野菜を育て、裏庭で鶏を飼育し、家族の衣服を裁縫し、ホームスクーリングで子どもを教育する。さらに、かつての専業主婦とは違って、生活をブログで公開して多くの人とつながりをもったり、手作りをネットで販売して稼いだりもする。こうした暮らしを営むことで環境保護活動の実践者や新しいフェミニストをもって自ら任ずる

彼女ら／彼らをレポートした本は全米で論争を巻き起こし、日本語訳も出版された（『ハウスワイフ2.0』エミリー・マッチャー著、文藝春秋刊）。

このような生き方には多くの批判もある。「食の安全や良質な保育を求めるのなら、家庭に閉じこめるのではなく、政府に抗議し、社会を改革すべきだ」「職場が女性に優しくないとって退職しても会社は変わらない。人間らしい仕事と暮らしを手にするために職場に残って闘うべきだ」「稼ぎのある夫と離死別すれば、そんな生活はいともたやすく崩壊する」と。いずれも一理も二理もある、もっともな正論だと思う。

けれども、女性も男性と肩を並べて働き、家事は時間の無駄だといって見向きもせず、不満だらけでストレスにさいなまれ、仕事と家庭のバランスがとれた生活というものを教えてくれなかったベビーブーマー世代の親をみて、意義のある幸せな人生を送ったと思うことができない彼女ら／彼らの心情には、同世代の私も共感するところがある。そして「働き詰めで、消費されるだけの一生が幸せなのか、真に意義ある生き方とはどのようなものか」という、あまりに素朴ながらも本質的な問いに向き合い、悩み、行動する、真摯な姿をみとめないわけにはいかないのである。

『ハウスワイフ2.0』の著者は、「新しい主婦」志向について、「実は不合理な社会に対する悲鳴なのかもしれない。食の安全や適切な医療、環境保護、働く親が軽視されている社会に、多くの人が悲鳴をあげているのだ」という。悲鳴をあげて、企業社会から去ること（あるいは去りたいと思うこと）を「社会全体のことをまるで考えない、経済的に恵まれた中流階級の甘えだ」と切り捨てることはたやすい。しかし、そのかすかな悲鳴に本気で耳を傾けようとしないところに、労働運動や女性運動が停滞から抜け出せず、多くの組織で後継者を見出せない理由のひとつがあるような気がする。

（柳 宏志 連合総研研究員）